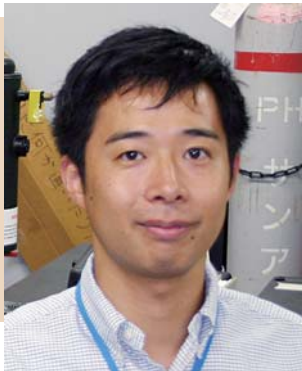




分子研を去るにあたり



木村 哲就 理化学研究所 城生体金属科学研究室
(前 生命・錯体分子科学研究領域 生体分子情報研究部門 助教)

分子研を去るにあたり

きむら・てつなり / 2000年3月京都大学工学部工業化学科卒業、2005年3月京都大学大学院工学研究科分子工学専攻博士後期課程修了、博士(工学)取得。2005年4月大阪大学蛋白質研究所博士研究員、2005年9月カリフォルニア工科大学化学科博士研究員を経て、2009年12月より分子科学研究所生命・錯体分子科学研究領域助教、2013年4月より現職。

私が分子研という名前を耳にしたのは、大学4年生で研究室に配属された直後でした。研究室の先輩達が必死に作ったタンパク質試料を氷に挿して分子研に向かい、ほぼ徹夜で計測をして帰ってくる、という研究の右も左もわからないルーキーにとって、分子研は過酷な場所として印象づけられました。ほどなくして、先輩達が分子研に行っているのは、種々のレーザーが並ぶ北川禎三先生の研究室で共鳴ラマンスペクトルの計測を行うためであり、分子研は恩師である高橋聡博士(現東北大学多元研教授)が学位を取得された場所でもあるということを知りました。加えて、私が大学4年生で最初に触れた溶液混合装置の心臓部であるマイクロ流路は分子研の装置開発室で加工されたものであり、分子研は様々な技術を持ったプロフェッショナルの集団であるという印象を強く持つようになりました。

2009年12月に分子研に着任した当時は実験棟の耐震工事の真最中でした。そのせいもあって、建物内は暗く、実験棟の人口密度も高くなく、少し寂しい思いをしたことを覚えています。とはいえ、実験棟南半分の耐震工事が終わると、所属した古谷グループは引

越しを始め、真っ新な研究室に実験装置が急速にそろっていくという、研究室立ち上げの大変よい経験をさせていただきました。また、大峯所長が着任されてから組織が変わって行く様子を目の当たりにすることができたことも幸いでした。さらに、分子研コロキウム後のワイン会などで、それぞれのグループがどのような研究に力を入れているのか、各人がどのような考えでおられるのかということをござっばらんに伺うことができ、組織内部の相互理解の重要性を再認識させていただく重要な機会もいただきました。

分子研で研究を進めて行く際、装置開発室の方々には本当にお世話になりました。装置開発室メンバーの全員にそれぞれ重要な装置を作って頂き、研究の進展に大きな貢献をしていただきました。現在、分子研の装置開発室ほど近くにあり、フットワーク軽く、こだわりを持って研究を助けてもらえる組織は希少だと思いますし、『あの装置開発室があればなあ……』というのを常日頃、実感しています。また、機器センターや装置開発室に、小型から大型の様々な実験装置があることを知ってからは大変お世話になりました。こ

のような共通施設の存在は何ものにも代え難いものであり、大変有り難いものでした。

今思い返して残念に思うことが2点あります。一つは、若手研究者間の交流の機会をもっと持ち、本音でサイエンスについて話し合えるような仲間になればよかったということです。南実験棟には新たなラウンジが完成したと聞いています。そのような場を活用して、若手での積極的な交流が促進できれば、若手発信の分子科学研究に関する新たな流れを生み出せるのではないかと期待しています。二つ目はUVSORを利用できなかった点です。せっかくの大型装置を利用して生体分子に関する新たな研究を展開できれば良かったのですが、間近にあるにもかかわらず利用できず、あらゆる点で私の力不足でした。以上の点に対しては、新たな場所で、誠実にサイエンスに向き合うことで、何らかの形でお返しをできるような努力をしたいと考えております。

最後になりましたが、古谷准教授を始め、生体分子情報学部門の宇理須名誉教授、秋山教授および所属メンバーの皆様、そして装置開発室の皆様には大変お世話になりました。心よりお礼申し上げます。